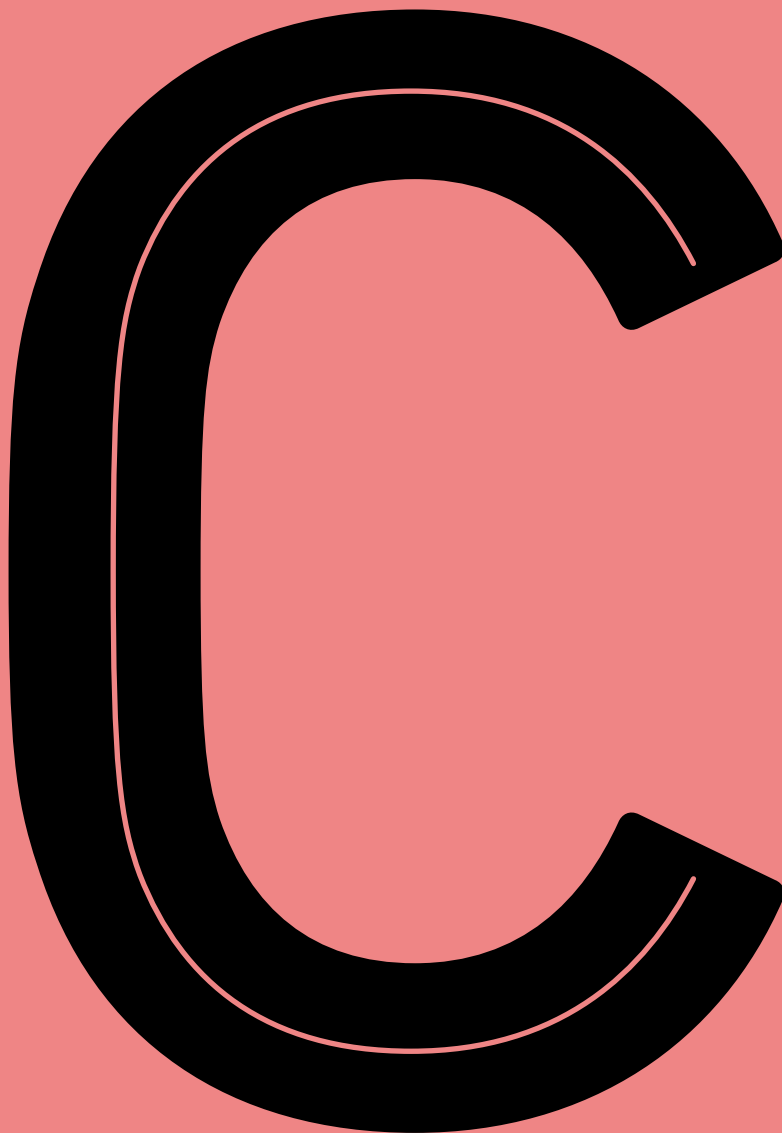


paper



no.003



野井成正 × 梅田哲也
(インテリアデザイナー) (アーティスト)



槻橋修・雨森信
(建築家) (アートディレクター)



益山貴司
(劇作家、子供鑑人代表)



野井成正 × 梅田哲也

(インテリアデザイナー)

(アーティスト)

異なる活動領域を持つ2人による対談企画「CO-DIALOGUE」。3回目となる今回は、80年代よりバーや飲食店などの設計を手がける野井成正氏、音や空間にまつわるアーティストとして作品を発表する梅田哲也氏を招き、両者の空間に対する考え方から、個人の創造活動が社会でどんな可能性を開くか、お話いただいた。

トンチから生まれるものの強度

野井：先日、梅田さんの出版作品「大きなことを小さくみせる」を拝見させていただきました。神戸と大阪・西成で行われた展示の記録でしたが、西成では古いアパートを改装したそうですね。

梅田：2011年の夏から、西成の使われていないアパートを改修し始めて、11月～12月の頭にかけて建物全体を使ったインスタレーションの展示を行いました。

野井：建築としての強度は大丈夫だったんですか？

梅田：建物は絶壁に沿う形で建っていて、梁が絶壁に直接刺さっている分、強度はあるんですよ。それに空間としてもすごくおもしろかった。構造を調べてみると、もともと1階のみだったのを、その上に無理矢理2階を被せていました。しかも、梁の差し込み方もでたらめなんですよ。全然整っていない。

野井：僕は普段、インテリアの仕事でバーの改修やデザインなどしていますが、整頓された空間よりも何かイレギュラーなものが入り込んでいたり、少し崩していた方が居心地良いんですよ。なので、梅田さんがおもしろいと思われている部分は、なんとなく共感できます。

梅田：主催団体が、知り合いの建築家に査定をお願いしたら、何から何まで建築基準法に抵触していて、もう建て直すしかないと言われたそうです。大家さんのお父さんが建てたそうですが、「違法と言われても60年間ピクリともせず建っとんねん」という言葉にはすごい説得力がありましたね(笑)。電気配線も整頓されていないのだけど、一方でよく考えられているんです。例えば、横になったままでも部屋の電気を消せるように、蛍光灯のスイッチから紐を継ぎ足して長くしている家がありますよね。そういう一見冗談みたいな工夫、生活の中での合理性みたいなものがあるところで働いていました。

野井：最近では、あまりに何事も規格化されていますよね。建築

でも、基準となる法律をクリアしないと建築として認められない。それをクリアするだけでも大変なことだけれど、完成したものは逆に弱々しくなってしまう。そう考えると、梅田さんのおっしゃるような、ある種のトンチの効いたものって、実はすごく重要なものかもしれないですね。

人がいた痕跡を掘り起こす

野井：昔、北加賀屋にあった藤永田造船所あたりで造船関係の業界新聞を配達していたことがあったんですよ。当時は造船所がびっしりと並んで、船に運ぶ積み荷を載せたトラックがひっきりなしに道を通っていました。何千人という人が働いていましたが、今は造船所を閉めるところも多く、寂しくなってきましたね。

梅田：人が暮らしたり働いたりする場所というのは、機能性でどんどん研ぎ澄まされていく部分と、その逆で見て見ぬふりをされたまま、そこからこぼれ落ちていく部分に分かれると思うんです。いつの時代かに淀んでしまって、研ぎ澄まされなくなった部分にこそ目を向けると、驚くような発見があるような気がします。

野井：僕が新聞配達していた周辺も、今では造船所の倉庫やドックのフレームだけが残っているだけですが、それがまたカッコいいんですよ。何千人という人たちが動いていたリアルな生き様が壁や床に染み込んでいますからね。ここで作品を展示したら良いだろうなと思っていました。

梅田：名村造船所跡地には、昔は造船の設計図を等倍で引いていたので、広大なフロアにそのときの図面が残っているんです。それを見た瞬間にゾクゾクしましたよ。今年10月には、そこで展示を予定しています。

野井：それは楽しみですな。

梅田：僕の作品は、もともとその空間にある工夫や行為の跡に目を

photo: Mai Narita



向けるきっかけなんです。それは、もの見え方を反転させるような行為でもあって、なぜおもしろいか理由づけされていないようなことを、でもおもしろいかもしれないと気づいてもらう導線をつくることだと思っています。自分の作品を良く見せるために配置を決めるのではなく、その場所のおもしろさを伝えるために、ものを置いたりするんです。

生活の延長にある技術

梅田：設計の際、野井さんは空間をどのように見えていますか？

野井：改修するときに壁紙や建具などが残っている場合、極端に言えば、まっさらにして、やっと空間を読める状況になります。用途がレストランだとしたら、お客さんが食事をするためにどんなテーブルと椅子が必要か、どのくらいの大きさか、おのずと導き出されますからね。

梅田：空間を裸にしたとき、空間の個性みたいなものが見えやすくなりますよね。ギャラリーや美術館などの均質な空間でも、壁を取ったりするだけで、それぞれまったく異なる表情を持っていることがわかる。それを受けて、僕の場合はインスタレーションを構成します。野井さんの場合は、均質な空間に何を置いていくかというところで、設計の方針を決めるのだと思います。

野井：そうですね。私がそこで重要だと思っているのは、わかりやすく言うと空間のコマーシャルみたいなもので、コマーシャルというのは、10人中8人くらいがわかる仕掛けをしないとイケない。ただ、それだけで人を動かすことはできないんです。

梅田：そうですね。わかりやすさとは別の要素がいる。

野井：例えば、木を使う場合でも木の動きを空間に利用する。以前手がけた大阪・法然寺横町の「川名」というバーがあるのですが、そこでは水浸しにした木をボトルラックの壁面ディスプレイとし

て組み込みました。しばらくして動き出した木が、ある程度乾燥してくると止まって、動いた分だけすき間が開くんです。その微妙な差異が人を惹きつけるような魅力につながるのだと思っています。この表現はアートとも言えるかもしれない。

梅田：素材への理解や経験がないとできないことですよね。昔からの大工の職人さんは、木目の向きから釘を打つ方向を計算しています。向きによって強度が変わることも全部わかった上で、つくっていることにはとても驚きました。

野井：そうそう。木の持っている性質を生かして強度が増すようにほぞ組みをしたりするんです。長年の鍛錬と伝承によって生み出された実践的な知恵こそ、本当の技術と言えますよね。そう考えると、今の木はほとんどが合板なので味気ない。

梅田：今は、いろんなことが便利にできてしまうから、経験や修練による知識が身につくづらけれど、その分、昔の人の現場を見ると勉強になるんですよね。伝統から培った技術に立ち戻ったときに、それが現代アートなんかよりもよっぽどラジカルで批評的なものに見えるときがある。

野井：その技術というのは、生活における知恵みたいなものの延長線上にあって。実は、誰しもがしているような生活の中にある工夫や遊びみたいなものを突き詰めれば獲得することができるのだけれど、便利になりすぎてしまったことがそれを阻害しているのかもしれないですね。

野井成正 Shigemasa Noi	1944年大阪生まれ。1965年頃より店舗設計、エキシビションデザイン、ディスプレイデザインに携わる。1982年に「野井成正デザイン事務所」を設立。ショップデザインや家具などのデザインを中心に、さまざまなクリエイティブワークを手がけている。
梅田哲也 Tetsuya Umeda	大阪在住。日用品や家電を改造した装置と自然現象を組み合せ、光や音、動きを伴う空間をつくり出す。主な個展に、2011年「大きなことを小さくみせる」神戸アートビレッジセンター、「小さなものが大きくみえる」新・福寿荘(大阪)など。



リレーコラム つないで見える、人とまちの多彩なあり方

「未分化」のまちづくり

槻橋修

Osamu Tsukihashi



建築家

1968年富山県生まれ。2002年から2009年まで東北工業大学講師。2009年より神戸大学大学院准教授。ティールハウス建築設計事務所主宰。東日本大震災復興支援活動として被災地の1/500復元模型を全国の建築学生と制作する活動「失われた街」模型復元プロジェクト(www.losthomes.jp)を進める。アーキエイド実行委員。

> 槻橋さんが選ぶ次のコラムニストは…

小川次郎氏(建築家)

学生と共に、建築とアートを深いレベルで実践するアニキのような方です。(槻橋)

まちの循環を生み出す アートプロジェクトの実践

雨森信

Nov Amenomori



大阪市立大学都市研究プラザ特任講師 / Breaker Project ディレクター

2003年より大阪市の文化事業として「Breaker Project」を企画。「水都大阪2009」にて藤浩志プロジェクト「かえるシステム」ディレクター、「BEPPUPROJECT2010」美術部門ディレクターを務める。既存の美術空間やシステムにはおさまらない独自の表現活動を開拓するアーティストとともに、地域に根ざしたアートプロジェクトに取り組み、実践を通して「芸術と社会の生きた関係」を探求する。http://breakerproject.net/

> 雨森さんが選ぶ次のコラムニストは…

藤浩志氏(アーティスト)

未来を創造していくプロセスとして各地で表現活動を展開する美術家です。(雨森)

東日本大震災の復興支援活動を通して、地域再生のためのまちづくりの現場に関わる機会が多くなった。本業である建築設計にも言えることだが、建築家がデザインや専門技術を一方向的に「売る」という形には疑問を感じる。住宅建築の場合、建築家と施主とが共に将来の住まいについてとことん話し合い、最後には施主が建築家になるくらいまでになったら理想的な住宅建築ができるのではないかと思う。「生みの親」となった施主はその建築をよく理解し、将来にわたって家と家の関係を築いていけるだろう。

まちづくりでも同じことが言える。実際に復興の現場では、「集落住民みんなでまた一緒に暮らしていきたい」という大変シンプルな希望でさえ、実現しようとする途端に制度や合意形成のための極めて複雑な手続きの壁が立ちほだかり、当事者でありながら素人である住民にはなかなか手の出せない世界に突入してしまう。そこで専門家の出番となり、合意形成を支援し、行政や各種制度との

大阪で地域密着型アートプロジェクト「Breaker Project」をスタートしてから早くも10年目を迎える。表現者と鑑賞者、双方にとって有効な創造活動の現場をまちの中に開拓し、芸術と社会をつないでいくことを目的としたこのプロジェクトは、活動エリアとする新世界(浪速区)や山王周辺(西成区)の場所、人、歴史と深く関わってきた。鋭い洞察力を持つアーティストの内発的動機を軸に、そこから立ち上がる作品のプロセスを地域住民と共有することに注力し、地域に根ざした作品(活動)を生み出す実験の場である。

その社会的効果として、潜在する地域の記憶や魅力また課題を掘り起こし、日常の創造性(人々の潜在力)をエンパワーメントし、地域のさまざまなレベルにおける分断を超える新たな回路を生み出しつつあるということが挙げられる。これらのことは、まちづくりのプロセスのなかでアートに注目が集まる理由でもあるのだろう。都市や地域の再生の現場において、アートがひとつのツールとし

「橋渡し」を行うのだ。しかし、やはり当事者である住民が主体であり、将来にわたってその土地で暮らしを創出していくのは彼らであるということ忘れてはならない。

極めて多岐にわたるまちづくりの取り組みに共通するのは、究極のところ、専門家が当事者=住民になるか、住民が専門家となるかが一番よいのだ。専門家と素人の境界が曖昧になり、地元と客人の境界が融合していく「未分化な地平」にこそ、「まちづくりの理想郷」がある。その意味でも、まちづくりの現場に学生や大学のゼミが入っていくことには、特別な意味と効果がある。学生たちはまさしく専門家と素人の中間的存在であり、彼ら自身が教育と研究の未分化な状態で地域に入り、迷いながら活動する。当事者としての感受性を持ち、住民たちとの親和力が極めて高い。そしてプロセス全体を未分化な状態=「教育」の場へと自ら変容させてしまうのだ。

で重要な役割を果たすことを否定はしない。むしろその核として、力を発揮すべきだと。しかし、そのツールの特性をよく知った上で活用すべきであり、しかもそのツールはそれぞれ個性のある生物であるということ、それ故に思い通りにコントロールできるものではない、即効薬でもないということ忘れてはいけない。

唐突ではあるが、自然界に目を向けると多様な生物がそれぞれ生き延びるための行動が、結果として他の生物や植物にとって有益に作用していることがよくわかる。ミツバチが受粉していくのは蜜を吸い取り集めることが彼らの生命活動なのであり、土を耕すとされるミミズも、土の中の腐敗物を食べることが目的で、その結果、土が耕され生態系の循環を成立させているのだ。

このような循環のプロセスをまちの中に再生させていくことが、地域密着型アートプロジェクトの果たすべき役割でもあり、まちづくりへの第一歩なのではないだろうか。



コーポ北加賀屋 多分野で活躍する協働スタジオの住人による、北加賀屋のいま

REVIEW

BAR tatjana (バータチアナ)

Date 2012.7.7 18:00- Venue コーポ北加賀屋

バータチアナは、コーポ北加賀屋にて不定期で開催される楽しい仲間たちとのホームパーティーのようなもの。この夜は graf の服部滋樹さんにスペシャルバーテンダーとして参加いただいた。バーは、奥行わずか60cmのカウンターを挟みバーテンダーとお客さんが向い合うシンプルな構成で、美味しいお酒と良い音楽が色を添える。昼間には接点を持たない年齢も背景も違う人々がカウンターで隣同士になり、さまざまに語らうフラットな空間が出来上がる。この夜も途中から記憶は切れ切れ、服部さんがかける気持ちの良いラテン音楽が漂う中、楽しい仲間との、この日だけの極上の夜は更けていったのだった。

家成俊勝 (dot architects)

建築を専門としながら他分野の人々との協働プロジェクトにも多く携わる。



FOOD

北加賀屋ソウルフード

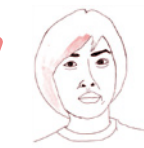
山田晃嗣 (jumbo)

喫茶レストラン 紫光 / しこう (北加賀屋 2丁目 3-15)

サービスランチ (コーヒー付き)



Illustration:Shingo Kokaji



1987年大阪府生まれ。映像制作などを行っております。コーポ北加賀屋ではコーヒー抽出責任者。

サービスランチのメインディッシュ、「ピフカツ」の肉の厚みに感服した。厚くても品がなく、薄くても存在感がぼやける。この衣と肉のバランスに、時代の速度に惑わされない芯のある姿勢が象徴されていた。まさに「至高(しこう)」である。

Bar Sachiko 夏祭り本祭 plays photo score, solo second half

Date 2012.8.5 20:00- Venue コーポ北加賀屋

即興演奏家・sachikoMによるライブシリーズ「Bar Sachiko」。今回は此花区にある梅香堂で開催されていた sachikoMの個展のクロージングとして、2つの場所を繋いだ企画ともなった。最小限のセットから紡ぎ出されるミニマルに構成されたサウンドに耳を傾ける。自分の体内で起こるサインウェーブ独特の反響が楽しく、頭を揺らしながらいろいろな角度で鼓膜に音を当ててみる。すると響き方がどんどん変わっていくので更に楽しい。音を聞くひとつの装置として自分の体がある事に気づく。ライブ後は新しくエアコンがついた1階に降りて納涼。浴衣姿もちらほら見かけ、耳にも目にも楽しい夏祭となった。

小西小多郎 (adanda)

より良く生きるをモットーに美術・舞台・音楽と関わり、今に至る。



SPACE

北加賀屋オルタナティブスポット

家成俊勝 (dot architects)

北加賀屋の設備計画



電線地中化が進んでいる。生活に必要なインフラが見えなくなっているのだ。景観は良くなるが、エネルギーがどこから来ているのか想像しにくくなる。私たちが部屋の照明のスイッチを入れると、どこか遠くの発電所のメーターが少し動いている。

家成俊勝：1974年兵庫県生まれ。建築家。関西大学法学部法律学科卒業後、大阪工業技術専門学校夜間部を経てドットアーキテツを赤代武志と共同で主宰。



読み切り連載

川辺の少年たちの物語 (3)

少年は欠けた茶碗を持って家を出た。夜は怖くから朝を選ぶ。崩れたアスファルト道が薄い靴底を通して彼の心を動揺させる。息をするのも苦しくて、いっそしないでおうと口をつぐむ。真つ赤な顔で空き地の前に立った時、立ちこめていた朝もやをなぎ払って太陽が顔を出した。

「太陽が一番えらいのや」安酒がなみなみと入った欠けた茶碗を口元に運びながら少年の父は大声で言った。「なんでかゆうたらな、タダやからや」と続いた後、「ほんで次にえらいんはこの俺や」となり、「なんでかゆうたらな、お前はタダで生きていけるからや」となって毎晩少年の頭を小突き回す。その度に少年はこいつはぼくのおとんやない、と自分に言い聞かせた。

朝日のまぶしさに気付いた少年は、ようやく口を開いて大きく肩で息をすると、手にした茶碗を振り上げる。ふと、少年の鼻を潮風がくす

ぐる。その匂いが、むかし一度だけ父と行った海岸を思い起こさせる。

文と絵 益山貴司

海が怖くて泣きじゃくる少年を抱き上げ、父親は海に入った。沖に停泊している船を指差し、「あれがお父さんの乗ってる船や。外国までいくねんぞ」と誇らしげに父親は語った。それはどうみても湾内遊覧船であったが、小さな子供には七つの海を駆け抜けるシンドバッドの船にみえた。

少年は、ゆっくりと腕をおろす。また、息をとめる。でないと涙があふれそうになる。そのまま、近くを流れる川へ向かう。晩酌の最後には、船に見立てて家中を航海した欠けた茶碗を、少年は、金色に輝く川面にそっと浮かべる。拍子に、こぼれ落ちた涙を濃い潮風が千切っていく。父親の形見の小さな船は、どんどん海へと流されてゆく。(了)

益山貴司

劇作家、演出家、俳優。代表をつとめる劇団・子供鉦人は、チャンバラ音楽劇「幕末スープレックス」を9月末に HEP HALL(大阪)、10月初旬にザムザ阿佐谷(東京)で公演予定。



NEWS from CFCO

おおさか創造千島財団(CFCO)は、大阪で行われる芸術・文化活動の支援と創造活動拠点の提供を通じて、関西の芸術文化の発展に寄与するとともに、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

NEWS 01

北加賀屋に「メガアート倉庫(仮)」誕生

NYの「Dia:Beacon」、パリ郊外の「Le Moulin」、表現形式や規模の面で従来型的美術館やギャラリーの枠内では、時に実現に制約を伴う異例の芸術プロジェクトを実現しています。このような既存の枠組みを超越する創造活動を促進する場として、北加賀屋に巨大作品を保管するオープン・ストレージ「見せる収蔵庫」が誕生します。まずは場所のお披露目として、今秋、ビューイング期間を設けます。今後は、木ノ下智恵子氏(大阪大学 CSCD 特任准教授)協力の元、保管作品の収集と公開を行う予定です。

公開期間：2012年10月～11月(予定)

場所：メガアート倉庫(仮) [北加賀屋 5-4-48]

共催：千島土地(株)、おおさか創造千島財団

NEWS 02

「NAMURA ART MEETING '04-'34 vol.4」を開催

おおさか創造千島財団がパートナーシップ助成を交付する「NAMURA ART MEETING '04-'34 vol.4」。21世紀初頭の30年間の芸術の変遷を追う本プロジェクトでは、vol.00「臨界の芸術論」に立ち返り、さまざまな人々と語り合う場を創造します。今回は「臨界の創造論」と題し、既存のモノや場の使い方などについて、複眼的にとらえる想像力を提起すべく、脱領域的な活動を試みるゲストにより多彩なイベントを開催します。

日時：2012年10月20日(土) - 21日(日)

場所：名村造船所大阪工場跡地 [北加賀屋 4-1-55]

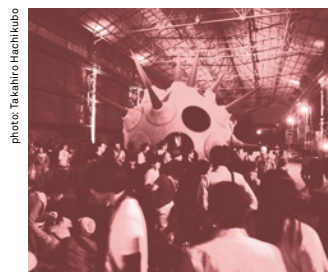
参加予定作家・トークゲスト：宇治野宗輝、梅田哲也 + 雨宮庸介 + クワクボリョウタ、ヤノベケンジ、Rubber (() Cement、今野裕一、服部滋樹ほか

問い合わせ先：NAMURA ART MEETING 実行委員会

URL nam04-34.jp MAIL office@nam04-34.jp



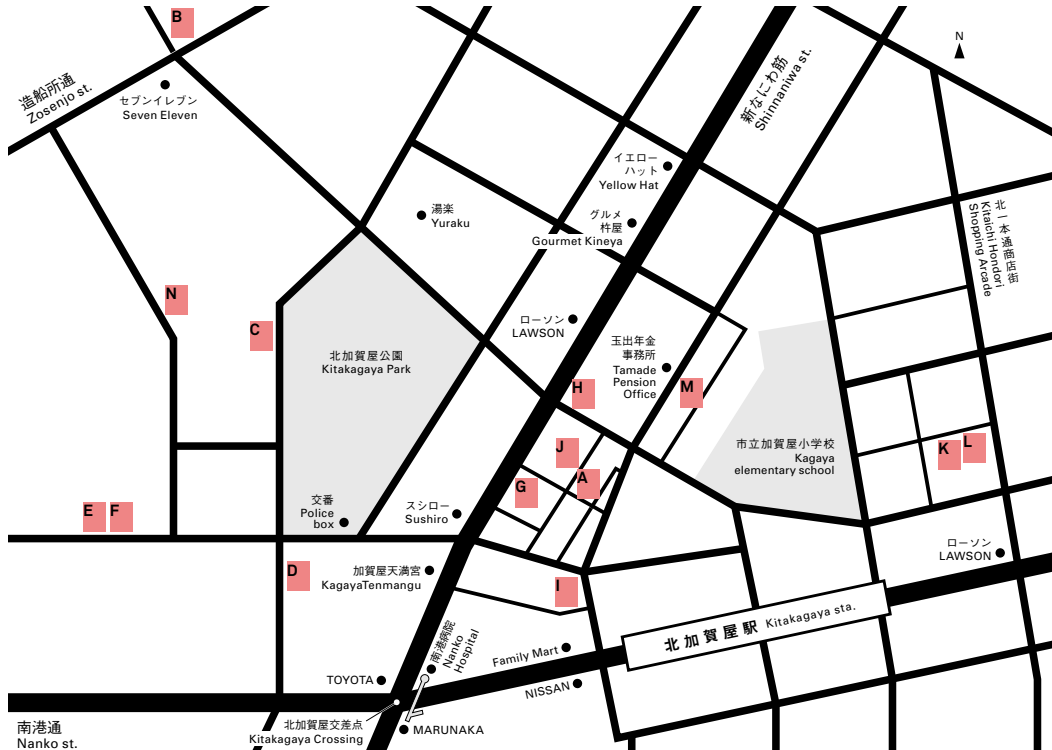
<News01> 建物外観、かつての貨車の扉を入口に設置している



<News02> NAMURA ART MEETING '04-'34 名村造船所跡地30年の実録 vol.03「起程II～海路へ臨む祭礼」

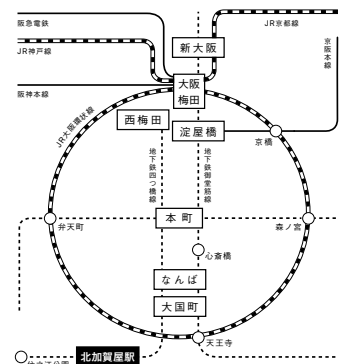
photo: Takahiro Hachikubo

おおさか創造千島財団では、芸術・文化が集積する創造拠点として再生が進んでいる北加賀屋エリアを、大阪における創造拠点のモデルケースとして、情報発信 / ネットワーキングの支援を行っています。



2012年9月10日現在

- [A] ク・ビレ邸 / インフォメーションセンター [北加賀屋 2-8-8] URL: shoosen-kwan.com/
- [B] クリエイティブセンター大阪(CCO) / 複合アートスペース
[北加賀屋 4-1-55 名村造船所旧大阪工場跡地] URL: www.namura.cc/
- [C] コーポ北加賀屋 / 協働スタジオ [北加賀屋 5-4-12] URL: www.coop-kitakagaya.blogspot.jp/
- [D] おしま絵画教室 / アトリエ [北加賀屋 5-2-31] URL: www.takayukioshima.jimdo.com/
- [E] 藝術中心●カナリヤ条約 / アートスタジオ [北加賀屋 5-5-35] URL: shoosen-kwan.com/
- [F] 鞆籠 / シェアハウス [北加賀屋 5-5-35] URL: shoosen-kwan.com/
- [G] AIR 大阪 (アーティスト・イン・レジデンス大阪) / 宿泊施設 [北加賀屋 2-9-19] URL: airosaka.com/
- [H] HOPE / アートスペース & カフェ・バー [北加賀屋 2-3-17] URL: space-hope.jugem.jp/
- [I] Co.to.hana (コトハナ) / アトリエ & オフィス [北加賀屋 2-10-21] URL: www.cotohana.jp/
- [J] 隠れ屋 1632 秘密基地 / 手づくりメガネ & アクセサリー [北加賀屋 2-8-9] URL: www.kakureya1632.com/
- [K] cornucopia / ギャラリー [北加賀屋 1-6-28 カガ第2ビル1F] URL: www.cornucopia3.jp/
- [L] 騒ギニ乗ジテ / ギャラリー・バー [北加賀屋 1-6-1 カガ第1ビル1F] URL: sawaginijoujite.jimdo.com/
- [M] 北加賀屋クリエイティブファーム / コミュニティファーム [北加賀屋 2-4-6] URL: kitakagaya.exblog.jp/
- [N] メガアート倉庫(仮) / オープン・ストレージ [北加賀屋 5-4-48]



paper C No.003
by Creative Foundation for Creative Osaka

「paper C」は、おおさか創造千島財団が発行するフリーペーパーです。関西におけるクリエイティブな活動を、財団が主に拠点を置く大阪・北加賀屋エリアから発信しています。

発行日：2012年9月10日
発行元：一般財団法人 おおさか創造千島財団 事務局
〒559-0011 大阪市住之江区北加賀屋2丁目11番8号 千島ビル4階
TEL 06-6681-7806 FAX 06-6681-6188
URL www.chishimatochi.info/found/
編集ディレクション & 編集：多田智美 [MUESUM] 編集：永江大 [MUESUM]
アートディレクション：原田祐馬 [UMA/design farm] デザイン：廣田碧 [UMA/design farm]